

東洋興業会長 松倉久幸さんの 浅草六区芸能伝

【第85幕】

前号に続き、大衆芸能研究者・お笑い評論家の西条昇さんが、渥美清の魅力について掘り下げ綴る、特別企画の後編をお届けいたします。フランス座の花形から国民的俳優にまで上り詰めた浅草の誇る喜劇人・渥美さんの物語、どうぞご堪能あれ！

◇ ◇ ◇
浅草フランス座での舞台を観た電通の部長からのテレビドラマ出演の誘いに応じる形で、渥美清は昭和32年10月から11月まで日本テレビ『すいれん夫人とバラ娘』で朝丘雪路の扮する女探偵のダメ助手役を演じている。初めてリノリウム敷きでピカピカに光るスタジオの床を見た渥美が思わず靴と靴下を脱いで裸足になると、朝丘がコロコロと笑いながら「渥美ちゃん、いいのよ、こは土足のままで…」と教えてくれたという。朝丘の笑顔にノセられ、張り切った得意の珍演を繰り返していると、今度は浅草のコメディアンたちにとって憧れの檜舞台であった有楽町の日劇から声がかかり、同年12月に日劇『歌う人気スタア 陽気なクリスマス』、翌33年1月には日劇ミュージックホール『日

本髪の恋愛選手!!』に出演した。

テレビ、舞台上が続いて、映画の話も舞い込んだ。渥美にとつての映画初出演は昭和33年12月に公開された『おトラさん大繁盛』で、すでに「脱線トリオ」として人気だった由利徹、南利明と共に変な探偵を演じた。ちなみに役名は由利が由田、南が南田、渥美が八田であり、渥美はもう一人の脱線トリオのメンバーの八波むと志の代役として急遽呼ばれたのだらう。同じ頃、日劇の舞台でも八波の代役として呼ばれ、『脱線スキー教室』と題したコントで渥美は顔中を雪に見立てた粉で真っ白にして熱演したが、代役でやりすぎると由利徹、烈火の如く怒ったものである」と塚田茂が著書『とんどんクジラの笑劇人生』に書いている。

昭和33年12月7日からはフランス座で一緒だった関敬六、谷幹一と三人でコン



【今回の執筆者】
西条昇 江戸川大学メディアコミュニケーション学部 マス・コミュニケーション学科教授。大衆芸能史研究者、お笑い評論家、構成作家。メディアへの出演、新聞等への執筆、著書多数。



昭和33年12月の新聞で紹介されたスリー・ポケットの三人。右から渥美清、関敬六、谷幹一。(提供/西条昇)

トを演じる日本テレビの15分番組『ポケット・コント』が始まった。1回めで渥美がセリフ2ページ分を飛ばしてしまい、思わず関と谷を扇子でやたらに叩いたり、二人にそばをぶっかけたりしたのが逆にウケて、読売新聞などに好意的に取り上げられた。

早速 彼らのトリオ名を視聴者から募り、翌34年1月4日の回から「スリー・ポケット」を名乗っている。その矢先に渥美が二人に「俺はどうしてもトリオはイヤだ。やめるよ」と脱退を申し出た。話し合いの末、関と谷は渥美を送り出し、代わりに浅草座の海野かつをを加入させた。

昭和33年から翌34年にかけて、渥美は『春のおどり』夏のおどり』をはじめとする日劇の舞台にたびたび立っていたが、その頃にまだ無名だった「ハナ肇とクレイジーキャッツ」と共演したことがあった。以前、植木等がその時のことを僕に「当時売れてた漫才の方がそれぞれヤクザの組長で僕らはその子分になって、オウ、オウ」なんて張り合うシーンがあったの。その時、渥美ちゃんが毎回必ずジャンパーのチャックをゆっくり外して、中のシャツをポンと

叩いて、シャツ、着てんだ！」って凄むワケ。そんなこと台本には書いてないの。これが毎日楽しみでねえ。出る前にもう注文つけるのよ。渥美ちゃん、頼むよ、あれ、って」と例の独特の笑い方を交えて語ってくれた。

昭和34年5月にフジテレビで始まった『セールスマン水滸伝』で、渥美は頬と顎に髭を生やした荒川役で注目された。この番組で荒川の下宿する家主の夫婦を演じたのが、映画『男はつらいよ』シリーズの初代おいちちゃん役の森川信とおばちゃん役の三崎千恵子だった。のちに読売新聞の取材で当時の渥美について森川は「あれは天才的な弁舌のさえがあった」と語り、演出の丹羽茂久は「私もいつのまにか彼の調子に引かれ、今日はどんなアドリブをやるかと期待するようになった」と振り返った。例えば、一同が「なせば成るなさねば成らぬ何事も…」としめるところで渥美が「ナセルはエジプト大統領！」と割って入ったり、「私の考えでは…」という簡単なセリフを「私が側面から眺めますと…」と言い換えるなど、共演者を食ってしまう独自の面白さを発揮してみせた。

その頃の渥美を高校時代にテレビで観て弟子入り志願したのが、のちに口カビリー歌手やタレントとして活躍する鈴木ヤスシである。結局、学校の合間に付き人としてカバン持ちをすることになり、渥美の似顔絵の描かれた名刺を預かって、プロデューサーに会うとすかさず鈴木がその名刺を渡していた。大学1年生で鈴木は口カビリーの世界に入り、昭和36年10月にはフジテレビ『ジャズトナーメン

ト』の司会と歌でレギュラーに抜擢されて付き人を卒業していった。

昭和36年4月に永六輔が構成を務めるNHKのバラエティ・ショー『夢であいましょう』がスタートすると、渥美は三木のり平と共にコント部分を支える役割を担っている。色川武大は『なつかしい芸人たち』に、この番組で渥美が演じた〈電話を何度かけてもその家のおしゃまな子供が出てきてとりついてくれず、子供を懐柔しようとして四苦八苦する一人コント〉を〈今でも忘れられない傑作〉と書いた。

僕は永の弟子筋にあたる放送作家の大倉徹也と同40年に渥美の付き人となる石井恒一の二人から、このコントの詳細を聞かせてもらった。また、現在残されている映像の中では、渥美が殿様に扮して家来と話し、やたらと明るく軽薄な口調で「切腹すつか!」と繰り返すコントが面白かった。

昭和37年の1月末から2月にかけては、東京宝塚劇場での森繁劇団の旗揚げ公演に参加し、加東大介・原作『南の島に雪が降る』に森繁久彌、伴淳三郎、三木のり平、加東、山茶花究ら錚々たる喜劇人たちと共に出演。敗色漂う南方の兵隊たちの士気を高めるために結成された『演芸分隊』を描いた芝居で、齋田上等兵役の渥美は劇中劇『一本刀士俵入り』のお罵を演じて笑わせた。のり平の長男の小林のり一は『何はなくとも三木のり平』で〈劇中劇の渥美清さ



昭和30年代半ばの渥美清の名刺。表は渥美の似顔絵、裏に住所と電話番号が書かれていた。

んの舞台が凄かった。全部さらってしまいました」と語り、座長の森繁も『もう一度逢いたい』に〈万座を圧倒したのは渥美清である。(略)ともかくウケるので渥美は毎日シャカリキで、白く塗った戦場の女形に夢中だった〉と書いている。

昭和37年は渥美が役者として大きく飛躍した年で、持前の勳を生かして一流の相場師となる『ギューちゃん』と赤羽丑之助を演じたフジテレビのドラマ『大番』が10月に始まると世間に渥美清ブームが巻き起こり、11月に映画初主演作『あいつばかりが何故もてる』が公開された。翌38年4月公開の『拝啓天皇陛下様』では粗暴で字は無いがどこか憎めない山田庄助を演じ、当時の渥美の代表作となる。小さな目で細やかな心情を表現して観客を笑わせ、ホロリとさせる渥美の演技は舞台よりも映画向きであり、野村芳太郎監督がその魅力を上手く引き出したと言える。

昭和40年代に入るとブームは落ち着き、ドラマや映画にコンスタントに出ていたものの、『拝啓天皇陛下様』に続く代表作が生まれず状態が続いた。同43年の夏、それまで松竹でハナ肇が主演の人情喜劇を撮っていた山田洋次に、フジテレビから渥美が主演のドラマ脚本を書かないかとの依頼があった。山田は赤坂の旅館での顔合わせで渥美が披露したテキヤの口上とマルセル・パニョルの作品にヒントを得て車寅次郎を主人公にした『男はつらいよ』の脚本を書いた。同年10月から翌44年3月まで放送されたこのドラマは好評だったが、最終回で寅次郎が奄美大島でハブ

に嘔まれて死ぬと、視聴者から「何で寅を死なせたんだ」との苦情が局に殺到した。山田はそうした寅次郎ファンへの罪滅ぼしにと映画化を決心する。テレビドラマの映画化は当たらないという反対の声を押し切り、映画版『男はつらいよ』は同44年8月に公開された。



昭和30年代のテレビ局の控室にて。渥美(左)と初代付き人の鈴木ヤサシ。(提供/鈴木ヤサシ)

(執筆/西条昇)

来たる3月9日(日)19時より、浅草・東洋館で『喜劇人渥美清を語り継ぐ会』が開催されます。企画・出演は元・付き人で俳優の石井恒一と西条昇。ゲストに付き人出身で歌手の鈴木ヤサシ、東洋興業の松倉久幸会長、女優の岡本茉莉。料金は4000円。寅さんファンの方は是非。予約・問い合わせ atsmiasakusa@gmail.com

※イベント詳細グラフィア31頁参照